

考古学のおもしろさと意義

盛岡市遺跡の学び館 今野公顕

1 はじめにー考古学の現実

あなたは考古学と聞いて何を思い浮かべるだろうか。あまりなじみがない人にとっては、宝探しのようと思われるかも知れない。映画インディージョーンズ、埋蔵金、エジプトのピラミッド、縄文時代の三内丸山遺跡や百舌・古市古墳群の世界遺産などが思い浮かぶだろうか。太古の謎にワクワクするロマンがある。若者にも人気の小説やゲームなどでは、考古学者といえば「一人でこもって研究し、古の謎を解き、それを元に探検する」という一風変人のイメージだ。当事者から言わせてもらえば、若干当たっている気もするが、現実とは違う。

平成30年1月に新潟県が行った県民アンケート調査『考古学に関する県民意識等について』に興味深い結果がある。「考古学や遺跡に大いに興味がある・多少は興味がある」の回答は51.2%を占め、関心の高さがうかがえる。しかし「興味を持ったきっかけは何か」という設問には「テレビや映画」が67.6%を占め、「新潟県埋蔵文化財センターを知っているか、行ったことがあるか」という設問には、「知っているが行ったことは無い10.3%」、「どんな施設か知らない24.3%」、「聞いたことも無い54.1%」であり、「知っている、行ったことがある11.3%」と大きく水をあけた。

多くにとって、考古学や遺跡という言葉には興味があるが、現実はまだ謎ということだろうか。

今回の遺跡の学び館企画展「遺跡の名探偵」を御覧頂ければ、宝探しや冒険ではなく、昔の人が残した不動産の「遺構」や動産の「遺物」がある「遺跡」を研究対象とした「過去の人の営み」を復元するものということをおわかり頂けると思う。

本稿では、考古学のあゆみ、研究方法などを紹介しつつ、宝探しではない実際の考古学の面白さや、その意義について、業界の末席に座る者の視線から紹介したい。

2 考古学のあゆみ

日本の考古学は、歴史学の一分野として発展してきた。世界的には人類学の一分野として、人間を知る学問の一分野とされることが多い。

(1) 古物、好古、考古

古い遺物発見の記録は古くからみられる。飛鳥時代の668年に近江国(滋賀県大津市)で、寺院建立の際に銅鐸(宝鐸)が発見されたこと(『扶桑略記』)、平安時代の839年に出羽国田川郡(山形県酒田・鶴岡周辺)の海岸に、雷の鳴る大雨の後に石鏃が多数見つかったこと(石鏃が降ったという記録。『続日本紀』)などが知られる。

江戸時代には、好事家が珍しい物として石器や土器を収集し、器種の分類や絵図による集成などが進んだという。江戸時代の学者や政治家として有名な新井白石(1657-1725)は、『本朝軍器考』において、石鏃は天から降った神の鏃ではなく古い人工物であるとした。

珍品収集ではなく、歴史を考える視点の始まりは、1877年(明治10年)にお雇い外国人モースが行った大森貝塚の発掘調査とされる。好古、古物学と言われていた英語のアーケオロジー(archaeology)を「考古学」と訳すようになるのは、ハインリヒ・フォン・シーボルトが考古学を紹介する「考古説略」(1879年)発刊以降と言われている。

しかしそれを遡ること188年前の1692年(元禄5年)、今の文化財保護に通じる学術的な発掘調査を行い、遺跡保護を行った人がいる。時代劇「水戸黄門」のモデル水戸(徳川)光圀だ。「助さん」こと佐々介三郎宗淳に指示し、栃木県大田原市湯津上の侍塚古墳(国史跡。上侍塚古墳・下侍塚古墳)の被葬者を調べる発掘調査を行った。地元庄屋の大金重貞が実質的な現場監督をし、出土遺物は絵師に記録を取らせた。いわば日本初の「発掘調査報告書」といえる。水戸光圀にはその絵図で報告させ、出土遺物は光圀らの書簡とともに松の木箱に入れて埋め戻し、墳丘上には崩落防止

の松を植えたという。(出土品を光圀に献上していないことに注目。)なお、この発掘調査から来年は330年にあたり、記念碑が建てられ、栃木県は古墳の再調査に着手した。今も墳丘の松は地元で大切にされ、日本で最も美しい古墳のひとつと言われている。

(2) 日本考古学の発展

明治時代以降、西洋の考古学を学び、研究が進められた。ダーウィンの進化論を元に遺物の変化を把握する型式学、人は主たる道具をもとに発展したとし石器・青銅器・鉄器時代とした三時代法、地質学の地層累重の法則に基づく層位学などがもたらされた。

戦後、1947年から実施された静岡県登呂遺跡の調査は全国に報道され注目された。1950年頃から、郷土史を見直す流れの中で、郷土史家や学生による発掘調査が各地で行われた。宝探しのような発掘もあったというが、この調査者の中から各地の考古学研究を牽引する人たちが現れた。

国は、文化財散逸防止や法体制整備のため、昭和25年に文化財保護法を制定した。埋蔵文化財は、昭和29年法改正で発掘調査が届出制とされ、遺跡の乱掘を防止した。

(3) 開発と発掘調査

1960年代以降、高度経済成長に伴い工事で壊れる前に遺跡の記録をとる発掘調査が増加し、新発見が相次ぎ、遺跡のニュースが多くなった。

盛岡市では、1976年の東北縦貫自動車道建設に伴う岩手県教育委員会による発掘調査で、志波城跡が見つかり、発掘調査体制を整えた。

今も全国津々浦々で日々発掘調査が行われている。令和2年度、市教委遺跡の学び館では、市内の工事等に伴う本格的な発掘調査を10件、試掘調査24件、工事に立ち会い遺構遺物を確認する115件の立会調査を実施した。一般の遺跡＝埋蔵文化財包蔵地が法令に基づき「史跡」指定され保存されることは極めて稀で、多くは調査後に工事で姿を消す。社会と調和のとれた保護制度とい

えるが、史跡指定に値する遺跡が見つかっていても保存が円滑にできない問題もある(東京都「高輪築堤跡」の問題は記憶に新しい)。現代の考古学は、社会と文化財保護をつなぐ役割を担っている。

3 考古学の実際

考古学は、遺跡・遺構・遺物から情報をもらさずくみ取り、当時の社会を復元する。そこでは“遺跡の名探偵”たちが、日々、観察と仮説(推理)、実証、記録などの作業を行っている。基本的な手法や考え方の一部を、以下に紹介する。

(1) 考古学の対象

考古学は、人が作ったり変化させたりした人為物を研究対象とする。遺構や遺物を解釈し、人の営みを明らかにする学問だ。

手法の基本は、発掘調査によってみつかる遺構遺物の共伴関係(セット)や遺構の切り合い(重複)から、遺物の新旧関係(相対年代)を調べることだ。

発掘調査から得られる情報を総合して、はじめて人の歴史を考える「資料」になる。出土地不明な土器片一点だけでは、残念ながら多くは語れない。

(2) 共伴(共存・セット)関係

遺物のあり方の考え方に、一括遺物・共伴関係(セット関係)がある。物を作る技術は、集団生活に根ざしたものだ。一緒に出土する遺物は文化や生活スタイルをあらわし、個人ではなく社会によって異なる。現代の身の回りの物のセットと、100年前、1000年前のそれらは異なる。また、現代日本人のセットと現代ヨーロッパ人のセットも、異なる。この物のセットが、「文化圏」を表すと考える。

(3) 型式

人が関与した物には、個性が表れる。共伴した物にみられる個性は、空間(場所)と時間の範囲がある個性として、その社会の伝統に基づく。

この物の分類と比較で見いだされる個性をグループ分けしたものを「型式」と呼ぶ。型式が表れやすい個性的な遺構遺物と、人間生活に普遍的な遺構遺物がある。人間の社会を考える上で個性が表れやすい物で比較検討し型式化することで、

文化圏を把握できる。この際、場所と時期で特徴の差が大きい土器は好例である。

(4) 相対年代と実年代

グループ分けした遺構遺物相互の新旧を考え並べることを、相対編年という。出土した層位の関係を主に、他の文化圏の影響や時間の経過で変化した順序を考える。この相対編年に、その他の要素から実年代を当てはめ、ようやく約何年前という表現ができるようになる。

(5) 現場で考えることの一例

考古学を学べば、すぐにどこでもどの時代の遺跡でも調査できるわけではない。土質や遺物の特徴が地域によって違うためだ。調査や研究の成果を知り、現場を見て地域性を把握する必要がある。

実際の調査では、多くの可能性を想定し進めるが、特に気をつける例を紹介する。

①遺跡

遺跡の立地や全体の構造は、遺跡の特徴の重要な要素だ。集落跡であれば生業、城館であれば防御や支配地域などを考えることができる。

盛岡周辺では、縄文時代の集落は少し高い土地に、奈良時代以降は平野部に多い。平安時代末の岩手・秋田県北から北海道渡島半島南部の集落は、平野では大規模な堀を巡らせたり、山の上に営まれたりする。ここから生業や社会情勢がよみとれる。縄文時代と奈良時代以降の違いは、稲作農耕の有無をあらわす。平安時代末の様子は、社会が混乱し身を守る必要性があったことが推測できる。

志波城跡や盛岡城跡のような役所跡や近世城郭では、支配地域、交通路や流通経路、担った役割などが立地や構造から知ることができる。

②遺構

遺構は、土の違いを把握する事が重要だ。

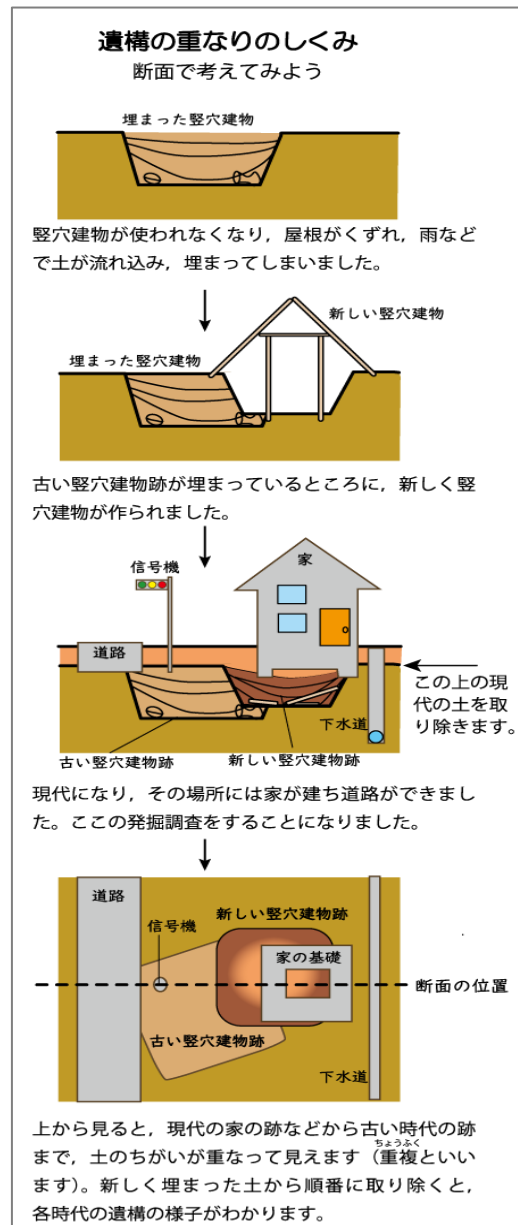
表土除去後の遺構検出作業は、医者が問診や聴診器などで病状を見立てるのに似ている。表面から観察し、埋まっている物が何なのか予想する。同じ場所に複数の遺構がないか(重複の有無)

も検討する。この判断を誤ると、遺構の破壊や次の作業で情報を見落とすことにつながる。

遺構を埋めた土(埋土・覆土)を掘り下げる時は、土の埋まり方を断面で観察するベルトを残し、土の特徴(色調・混入物・堅さ・粘性・出土遺物など)を把握しながら、上からタマネギの皮をむくように一層ずつ掘り下げる。こうすることで遺構廃棄以降の来歴や重複状況、遺物出土位置から遺構の年代推測が可能になる。

③遺物

最も多い出土遺物の土器は、洗浄した後、接合作業に当たる。器形や器種を予想しながら、破片を組み立てる。併せて出土地点、器種・器形ごとに分類をする。この際は、多くのことを考察しながら



作業を進める。たとえば、出土層位や遺構が違う物同士が接合した場合はその理由を考える。RA01 竪穴建物跡の床面出土土器とRA02 竪穴建物跡の最上層A層出土土器が接合した場合、01で暮らしていた人が割れた土器片を、埋まりかけていた02跡地の窪地へ捨てた可能性も推理できる。そしてRA02より01のほうが新しいことも言える。

4 これからの考古学 -考古学の意義

盛岡市の令和2年度市民アンケートに『地域の歴史・歴史遺産について』の調査がある。「守るべき文化財や歴史遺産がある」という回答は32.3%（ない64.4%）で、歴史遺産を未来へ伝えることに興味を持つ市民は、少数派と言える。

また、全国民対象の文化庁の令和2年3月の『文化に関する世論調査』における「この1年間に、コンサートや美術展、映画、歴史的な文化財の鑑賞、アートや音楽のフェスティバル等の文化芸術イベントを直接鑑賞したことはありますか。」の設問には、67.3%が鑑賞したり触れたりしたとしている¹⁾。このうち「歴史的な建物や遺跡（建造物（社寺・城郭など）、遺跡、名勝地（庭園など）の文化財）」は26.6%、「歴史系の博物館、民俗系の博物館、資料館など」は16.5%である（複数回答ありのため重複の可能性もある）。

全国民の67%以上が何らかの文化的な物に触

れていること、冒頭の新潟県民の50%程度が考古学や遺跡に関心があるという調査結果から、日本人の大半は歴史や文化にある程度興味を持っているといえよう。一方、盛岡市民の7割程度が守るべき歴史遺産がないと思っている調査結果は、歴史文化遺産を未来に伝える意義や必要性が伝わっていないこと、身近にあることを知らないことなどが表れていると考えられる。

考古学の成果は、空間（場所）と時間の個性を体現する。これに限らず歴史文化遺産は、地域の来歴に基づく地域の個性を体現している。

映画などではない身近でリアルな考古学や遺跡、その他の歴史文化遺産の面白さや魅力、現代における意義に関心を持ってもらえるように、関係者による発信と、市民への波及が必要だろう。

まずは、日々行っている発掘調査が考古学の成果の小さな1ピースであることや、得られる成果は地域の個性を示すことを発信し、歴史遺産のファンを増やすことが一歩なのではないかと思う。

<参考文献>

江上波夫監修 1976「考古学ゼミナール」山川出版社

斎藤忠 2001「日本考古学の百年」東京新聞出版局

栃木県立なす風土記の丘資料館 2004「水戸光園公の考古学」

新潟県 2018「県民アンケート調査報告書「考古学に関する県民意識等について」新潟県ウェブサイト

文化庁 2019「文化に関する世論調査報告書」文化庁ウェブサイト

盛岡市 2021「令和2年度市民アンケート調査踏査結果と考察「地域の歴史・歴史遺産について」盛岡市ウェブサイト

【practice 練習問題】

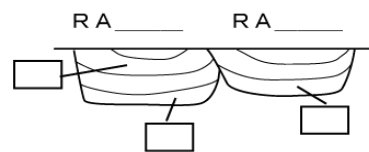
次の①～④の条件で出土した出土遺物 A・B・C の新旧関係を答えなさい。

- ①RA01 竪穴建物跡の床からB、埋土上層からAが出土。
- ②RA01 竪穴建物跡を壊して作られたRA02 竪穴建物跡の床面からCが出土。
- ③Cについて炭を、AMS 放射性炭素年代分析したところ900～930年前の結果。
- ④RA01 竪穴建物跡の埋土最上層に、西暦915年降下の十和田a火山灰が混入。

<考え方>

- ①からAはBより（古い・新しい）。
- ②からBはCより（古い・新しい）。
- ③・④からAはCより（古い・新しい）。

<答え> () → () → ()



ヒント：断面図で考えるとわかりやすい。

1) 29.8%が「鑑賞していない」と回答している。この割合は都市部より町村部の方が高い。施設整備状況などの文化環境の違いが現れている。 【練習問題】 答 (B)→(A)→(C) <考え方>新、古、古 <ヒント> : 上・RA01 RA02、下左から・A・B・C